

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 3日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520296

研究課題名（和文） レスター・サークルの出版ネットワークに関する研究

研究課題名（英文） Research on the Printing Network of Leicester Circle

研究代表者

竹村 はるみ (HARUMI TAKEMURA)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：70299121

研究成果の概要（和文）：本研究では、16世紀イングランドにおいて商業出版の政治利用をいち早く開始したレスター伯に着目し、その文芸パトロン活動の出版文化史的意義を検証した。特に、巡幸録出版に関する調査を通して、レスター伯率いる急進派プロテスタント貴族と軍人詩人の企図の連鎖を考察した。さらに、レスター一派の影響が宮廷祝祭のみならず地方祝祭にも及んでいたことを跡づけ、宮廷文化と市民文化の双方向的な影響関係を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：My research aims to reconsider the cultural significance of Earl of Leicester's patronage particularly in its political use of printing industry and bring into focus the new concept of literary authorship.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：英文学、出版文化史

1. 研究開始当初の背景

本研究は、レスター伯ロバート・ダドリーを中心とする16世紀イングランドのプロテスタント急進派貴族とエリザベス朝文人の関係を出版文化史の観点から再構築すると共

に、パトロン制度と商業出版の協働体制を検証し、それが近代初期イングランドにおける「作者」をめぐる概念の形成にどのような影響を与えたかを明らかにしようとすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、商業出版の政治利用をいち早く開始したレスター伯に着目し、その文芸パトロン活動の出版文化史的意義を検証することを目的とした。具体的には、1570年代以降レスター伯の汎ヨーロッパ主義的プロテスタント構想に賛同した詩人の創作活動の調査を通して、レスター伯を求心力として形成された文学コミュニティの在り様を歴史的に再構築することを目指した。

3. 研究の方法

1570年代から1580年代にかけてのレスター・サークルの出版ネットワークを解明するために、同時期にレスター一派の意向を反映する形で執筆・出版されたエリザベス一世の巡幸に関する出版物の調査を行った。特に巡幸パジェントの執筆に携わったジョージ・ギヤスコインやトマス・チャーチャードら軍人詩人の作品を主たる研究対象とし、(1)作品分析 (2)軍人詩人の人脈に関する調査 (3)レスター伯と書籍商の関係に関する調査、という3方面の調査を実施した。

4. 研究成果

本研究が中心に扱う年代は、1570年代末から1580年代前半にかけての一時期である。これは、エリザベス一世とフランス皇太子アンジュ公の結婚交渉問題、及び、カトリック大国スペインによる圧政に対して蜂起したネーデルラントへの軍事支援の是非、とい二つの外交問題をめぐって枢密院内部の亀裂が表面化した時期に符号しており、レスター一派による政治プロパガンダ活動が最も活発化した時期に相当する。本研究の成果を以下の主要な3つのテーマに分類して略述する。

(1) レスター伯と軍人詩人のネットワークの解明

地方巡幸は、エリザベス一世が心血を注いだ一大宮廷行事であったが、本研究では、これまであまり研究が進んでいない巡幸録の調査を通して、巡幸パジェントの執筆・出版に携わった軍人詩人とレスター一派の関係を明らかにし、これら巡幸録出版の背景には、女王の穏健的な宥和政策に対する兵士の不満を取り込みつつ、ネーデルラントへの軍事支援の機運の醸成を試みたレスター一派の企図が作用していた可能性を指摘した。

特に重要と思われるのが、1578年に敢行されたノーフォーク州への巡幸である。巡幸史の観点からすれば、この巡幸は異例中の異例

であった。ノリッジを州都とするイーストアングリア地方は、ロンドンから遠いという物理的な問題もさることながら、イングランドに軟禁中のスコットランド女王メアリの支援者が多い地域であり、1568年のメアリのイングランドへの亡命以降、不穏な動きが続いていたからである。その一方で、ノーフォーク州では急進派も一大勢力を築き上げており、カトリックとピューリタンの軋轢が絶えない地域でもあった。エリザベス一世のノーフォーク州への巡幸は、大きな緊張を伴う政治的パフォーマンスであり、そこで催された数々の余興や祝祭は、多分に政治的意味を付与されていたものと考えられる。本研究では、ノーフォーク州への巡幸の企画をめぐっては、レスター伯とその盟友サー・フランシス・ウォルシinghamが積極的に関与した可能性が高いことに着目し、ノリッジ入りした女王を歓待して行われた祝祭をネーデルラントへの軍事支援をめぐる二人の外交活動の文脈で再考察した。その結果、この祝祭の執筆、上演、出版に関して中心的な役割を果たした軍人詩人トマス・チャーチャードの余興には、汎ヨーロッパ主義的なプロテスタント同盟の盟主としてイングランドを位置づけ、ネーデルラントへの軍事支援を女王に要求する、というレスター一派が提唱する武闘派プロテスタント主義の影響が見られること、ただしそれは必ずしもパトロン貴族の先導だけによるものではなく、1570年代から徐々に進行していた市民層における国家主義の高まりとも連動していた可能性を明らかにした。

本研究ではさらに、チャーチャードが出版したノリッジ巡幸録(『チャーチャードの雑録の第一部』所収)の出版文化史的意義を検証した。他のヨーロッパ諸国と比較すると、イングランドにおける王室の演劇行事の印刷出版はかなり遅れを取っており、巡幸自体は女王の即位時から継続して実施されていたにもかかわらず、巡幸録が出版市場に出回ようになるのは1570年代以降のことである。チャーチャードの作品は、祝祭のテキスト化という新しい流れを生み出す契機となり、女王や宮廷貴族ではなく一般市民を観客とする新たな祝祭空間を創出したという点において、エリザベス朝祝祭文化の新たな方向性を示していると言える。

(2) レスター一派と書籍商の癒着の解明

1584年にネーデルラントへの遠征軍の総司令官としてレスター伯がハーグ入りした際には、イングランド軍の到来とプロテスタント主義の勝利を言祝ぐ書籍がライデンで出版される。本研究では、ライデン在住のイングランド人書籍商トマス・バツソンに関する調査を通して、出版特許をめぐりバツソンとレスター伯の間に何らかの互惠関係が

存在していたことを明らかにすると共に、レスター伯のパトロン活動は、必ずしも従来指摘されていたような上から下への圧力関係ではなく、市民的な商業主義に先導される側面も有していた可能性を指摘した。

レスター伯とオランダの出版業者の癒着を示す根拠として本研究が特に注目したのは、バツソンがレスター伯率いるイングランド軍のハグ入りを記念する目的で出版したと思われるジョージ・ウェットストーン¹の軍事書『兵士の名誉ある世評について』のオランダ語訳書のタイトルページに記されている出版特許の覚書である。この覚書には、本書の印刷出版を請け負ったバツソンがこの書物の出版と販売に際して特許を受けていたこと、そしてそれがレスター伯によって付与されたものであることが記されているのである。

本研究では、エリザベス朝における特許出版のあり方についても調査を進め、こうした特許が一部の有力貴族の推挙によって獲得される傾向があり、中でもレスター伯の積極的な関与が見られる点を明らかにした。オランダの書籍商バツソンが受けた特許は、レスター伯のこうした出版業界を取り込んだ広報戦略が海外にも及んでいたことを示唆している。

ただしその一方で、チャーチャードの巡幸録と同様に、こうしたレスター伯の活動が決して従来の上から下へという一方向のパトロン活動ではなく、市民と貴族の互恵的な関係に拠るところが大きい点も浮かび上がってきた。バツソンは、ウェットストーン¹の軍事書のオランダ語版を出版するにあたり、英語とオランダ語の発音対照表を巻末に付し、一種の語学テキストとしての特性を持たせた上で販売している。ここには、おそらくレスター伯の政治意図とは別に存在したバツソン独自の商業目的が作用している。英語の普及は、新しい読者層の開拓に繋がり、それはバイリンガルな書籍商というバツソンの職能価値を大いに高める効果を発揮するからである。バツソンの念頭にあったのは、ネーデルラントがイングランドの支配下に入ることによって見込まれる英語学習書の特需景気であり、レスター伯から認可された特許は、バツソンが予め自らの専売体制を整えておくための布石に他ならない。

以上、本研究の結果、勅許を介した書籍商の抱え込みには、レスター一派がネーデルラント遠征に向けて各方面に周到に張り巡らせた出版戦略の一端を窺えることが明らかになった。と同時に、それは、パトロン制度と商業出版が共存していたエリザベス朝特有の興味深い情報流通のあり方をめぐる新たな問題をも提起した。レスター伯と書籍商の関係は、両者の意図が複雑に絡み合った双

方向的な関係であり、従来のパトロンクライアントという図式では捉えきれない流動性を提示しているのである。

(3) 宮廷祝祭と大衆演劇における騎士道的エートスの醸成に関する考察

本研究では、1570年代以降の宮廷祝祭の分析を通して、レスター伯やその義子エセックス伯ら武闘派プロテスタント貴族の間で流行した騎士道的エートスの形成を跡づけると共に、それが大衆演劇や印刷出版を通して民衆文化へと浸透していく過程を考察した。特に、〈妖精の女王〉というロマンス的モチーフに着目し、それが1570年代の巡幸パジェントや宮廷祝祭で用いられるようになった後、1590年代の文学作品において両面価値的な側面を顕在化させていく過程を検証した。その結果、本来は君主崇拜を目的とした騎士道ロマンスという文学様式が公衆劇場や出版文化の成熟を背景として、制御不可能な多義性と拡散性を獲得していった様子が明らかになった。

1575年にレスター伯がその居城ケニルワースに女王を迎えて催した祝祭は、エリザベス朝文学に妖精が登場した最初期の事例とされている。本研究では、これを出発点と位置づけ、ケニルワースの祝祭の段階ではエリザベス一世と妖精の女王のあからさまな同化は行われていないこと、そして妖精の女王というモチーフが本来有していた隠微なエロティシズムは周到に排除される傾向にあった、という2点を指摘した。

ところが、こうした宮廷祝祭が女王の地方巡幸を経て、地方都市における都市祝祭の伝統と結びつく時に、妖精の女王のモチーフにも変容が生じる。より民衆的、大衆的な視点や趣向が接木されることにより、従来の宮廷祝祭では意図的に隠蔽されていたエロティシズムが復活するという興味深い現象が生じてくるのである。本研究では、女王のノリッジ巡幸に際してチャーチャードが執筆・企画した余興がその一つの転換点になったことを明らかにすると共に、その変容がもたらした意義に関する検証を試みた。

妖精の女王のモチーフの発展と変容に関する考察の結果明らかになったのは、宮廷祝祭が一般市民に対して公開される中で君主崇拜の意図が失われ、時にそれが政治風刺的な意図にすり替えられた点であり、この傾向はエリザベス朝末期において特に顕著に見られる。その際に、チャーチャードによるノリッジの余興が試みた高次文化と低次文化の混淆を一層推し進めた作品として着目されるのが、エドマンド・スペンサーの叙事詩『妖精の女王』である。スペンサーの叙事詩は、エリザベスを妖精の女王に見立てて両者の同一化をより明確にするという点において、ケニルワースの祝祭に代表される従来の

宮廷祝祭とは一線を画する大胆なものであり、妖精の女王とその騎士団というロマンス的な構想を採用することによって、妖精の女王のエロティシズムを前景化させる。スペンサーの『妖精の女王』をエリザベス朝の祝祭文化の文脈で精査した研究は意外に少なく、本研究の意義深い成果の一つと言えよう。

さらに本研究では、1580年代、90年代の宮廷祝祭が、妖精の女王のエロティシズムを解放する一方で、騎士の過度な欲望を戒めるという教訓性を強めていく過程にも注目し、これがレスター伯、そしてエセックス伯を求心力として形成された武闘派プロテスタント貴族が纏った騎士道文化的象徴体系と連動していた点を明らかにした。騎士道文化が、君主制の礼賛だけではなく、貴族階級、特に軍人貴族のエートスを構築する機能を有したことは既に指摘されているが、エリザベス朝における騎士道ロマンス・ブームを、レスター伯のネーデルラント遠征に象徴されるエリザベス朝貴族のミリタリズムの高まりに結びつけ、それが1590年代においていかに市民文化へと浸透していくか、という問題を考察した点に本研究の意義が認められる。

特に、ウィリアム・シェイクスピアが90年代に執筆した『真夏の夜の夢』と『ウィンザーの陽気な女房たち』を宮廷祝祭との関連で再検証することにより、宮廷文化と市民文化の混淆は貴族的エリート主義と世俗的大衆性を内包していた騎士道ロマンスの流行と密接に関係していたことを明らかにした。

騎士道文学の衰退をもたらしたのは、宗教改革でもなければ人文主義でもなく、他ならぬ民衆への社会的拡散であった、とする定説がある。水が高い所から低い所に流れるように、騎士道ロマンスが王侯貴族や知識層によって構成される高次文化から市民を主体とする低次文化へと下賜された時、ロマンスの真の瓦解が始まったという見方である。このような進化論的な文学史観に立てば、エリザベス朝の大衆文化における騎士道ロマンスは、騎士道文学の残滓とも言うべき成れの果ての姿を晒していることになる。本研究では、少なくともエリザベス朝における騎士道文化ブームの実態は、こうした従来の図式的な構図にはあてはまらないこと、むしろ中世末期より漸次衰退の途にあった騎士道ロマンスが宮廷文化と市民文化が緊張感を孕みながらも緊密な形で共存していたエリザベス朝特有の文化的風土の中で復活したことが浮き彫りになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①著者名：竹村はるみ、論文標題：エリザベス朝宮廷祝祭における妖精の女王のロマンス的変容、査読：有、発行年：2012年、日本シェイクスピア協会50周年記念論文集、印刷中

②著者名：竹村はるみ、論文標題：トマス・チャーチャードと処女王言説—ノリッジ巡幸パジェント(1578)を中心に、雑誌名：Shakespeare News、査読：有、巻：51(第1号)、出版年：2011年、ページ：8-20

③著者名：竹村はるみ、論文標題：レスター王国の出版戦略、雑誌名：Albion、査読：有、巻：56、出版年：2010年、ページ：22-45

〔学会発表〕(計3件)

①発表者名：竹村はるみ、発表標題：トマス・チャーチャードと処女王言説—ノリッジ巡幸パジェント(1578)を中心に、学会名：十七世紀英文学会関西支部第183回例会、発表年月日：2011年6月25日、発表場所：大阪YMCA会館(大阪府)

②発表者名：竹村はるみ、発表標題：“To teach the ruder shepherd how to feed his sheepe”—『羊飼いの暦』とスペンサーの詩的構想、学会名：日本英文学会関東支部大会、発表年月日：2010年11月6日、発表場所：慶應義塾大学(東京都)

③発表者名：竹村はるみ、発表標題：ロマンティック・リバイバル—騎士道ロマンスとエリザベス朝文学(セミナー)、学会名：第48回シェイクスピア学会、発表年月日：2009年10月4日、発表場所：筑波大学(茨城県)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹村 はるみ (TAKEMURA HARUMI)

立命館大学・文学部・准教授

研究者番号：70299121